

## E. サティ作曲《ヴェクサシオン》についての分析と演奏解釈

久次米祐江

[要旨]

《ヴェクサシオン》(1892-1895)は、フランスの作曲家エリック・サティ(1866-1925)により作曲されたわずか1ページの作品である。その作品冒頭には、作曲者自身の手による以下の文が置かれている。

「このモチーフを連続して840回演奏するには、大いなる静寂の中で、真剣に身動きしないことを、あらかじめ心得ておくべきだろう」

本発表では、この《ヴェクサシオン》についての分析とその演奏解釈について述べる。

まず楽譜の表記について考察する。次に楽曲内部について分析する。更に、連続演奏に用いた構造に焦点を当てることとする。

当該作品の楽譜はわずか1ページ、全3段からなる。3段目には「THEME」の表記がある。この「主題」をあらわす記号の挿入箇所は作品中に3ヶ所記載されている。楽譜の表記は、拍子記号や調号、小節線、フレーズ、強弱記号を排している。主題における音階、音の数、旋律線、拍数には、数の表象、形状表象が用いられ、音程度数には、中世の音程に対する思想が反映されている。

CD《ヴェクサシオン》の連続演奏における内部構造は、循環構造となっている。

「テーマ(T)」を含む様々な組み合わせによる「A・B」42回を演奏者が連続演奏し、録音する。この循環構造は、先に述べた3ヶ所の主題位置と、1段目の破線複縦線の扱いがカギとなり、ゆるやかな主題の挿入による構造となった。

聴者(聴く側)はそれを20回連続再生する。これにより構造は、入れ子のように、大きな循環構造の中に小さな循環構造を内包することとなる。

このCDによる連続演奏という手法により、演奏者と聴者との共同作業による能動的再現芸術が実現した。これは「芸術の再現に演奏者と聴者がいかにして関わるか」という投げかけに「両者の共同作業による芸術再現」という形で応えたものである。